

原采蘋著『西遊日歴』について

—九州文人との交流（１）島原を中心に—

小谷 喜久江

日本大学大学院総合社会文化博士

Hara Saihin's *Saiyu Nichireki*

—Fellowship among Kyushu region poets (1) Shimabara Domain—

KOTANI Kikue

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies, Ph.D

Hara Saihin, a kanshi poet of the Edo period, left several diaries composed of kanshi poems. Among those diaries, *Saiyu Nichireki* is her last and longest, comprising 381 kanshi poems. Saihin wrote this diary at age 59, while traveling through the island of Kyushu for two years.

After this journey, she left her hometown for Edo to accomplish her dream of finding a publisher for an anthology of her father's kanshi poems. On the way to Edo, however, she caught influenza in Hagi city in Yamaguchi prefecture. A month later she died, with her last wish being for her friend Tsuchiya Shokai to publish her father's anthology. When Tsuchiya asked her, "What about your anthology?" she answered, "Please add it in the last pages."

I wonder which of her anthologies Saihin wanted to publish. If *Saiyu Nichireki* is the one, we should learn more about this little-known anthology. I will examine this question in this paper.

1.はじめに

原采蘋についてはすでに本紀要において数回にわたって発表を行ってきたため、本人についての略歴は前稿を参照していただきたい。本稿では、これまで未発表であった采蘋の最晩年の日記で、しかも最長の日記である『西遊日歴』の紹介に稿を集中させることとする。筆者はすでに学位論文¹において一部を紹介したが、二年超に及ぶ旅の記録全部を紹介することには限界があった。改めて『西遊日歴』の全体像をシリーズで紹介したいと考えている。本稿のもう一つの目的は、采蘋は遺言で父の遺稿とともに自らの詩集も出版したい意向を示したことから、『西遊日歴』がその詩集であった可能性を考察することにある。

2. 自筆本『西遊日歴』について

『西遊日歴』は采蘋の晩年に当たる安政三年（1856）四月二十三日から同五年夏までの九州遊歴の記録である。この詩集のほかに、山家を出発した四月二十三日から五月二十三日までの日記²と、天草滞在中鹿児島に足を延ばした時に記録した安政四年三月から十二月までの日記『漫遊日歴』³がある。この二つの日記は、詩は含まれない日常の記録であり、『西遊日歴』が漢詩のみで綴られた日記であるため、旅の詳細を知るうえで貴重な資料である。

現在『西遊日歴』は、東北大学附属図書館狩野文庫に、本人による写本が所蔵されており、また佐谷松窓が安政六年春、つまり采蘋没後の年に筆写した『原采蘋女史西遊日歴抜粹』と、その佐谷松窓写本

¹ 日本大学大学院総合社会情報研究科総合社会情報専攻博士論文：<http://hdl.handle.net/11263/230>

² 『東遊漫草』の後ろに付記されている。『東遊漫草』は房総遊歴の日記で自筆本が秋月郷土館に蔵されている。

³ 秋月郷土館蔵

をさらに転写した『原采蘋女史西遊日歴抜粋』の二冊が秋月郷土館に所蔵されている。先行研究は『抜粋』からの研究がほとんどで、東北大学図書館狩野文庫の『西遊日歴』は、その存在が確認されていたにも関わらず、自筆本の紹介は管見の限りまだない。今回、筆者はその複写を入手し、解説を試みた。

『西遊日歴』は本人の写本とはいえ、始めは清書されたきれいな字で書き始められているが、後半に進むに従い字も乱れ、訂正も目立ってくるため、判読しがたい詩も多くある。このことから推測されるのは、采蘋が何かの目的からこの詩集を清書しておきたいという思いがあったと考えられる。この三百八十一首が収録される詩集は、采蘋最晩年のものであり、遺稿中最も大部の詩集である。采蘋は遺言で、父の詩集の後部に自らの詩集も載せてほしいと言いつ残している。今、采蘋自筆の『西遊日歴』の清書を見ると、佐谷松窓写本との異同が認められることから、他に原本が存在していたはずである。『原采蘋女史西遊日歴抜粋』の山田新一郎氏の注によれば、原本との比較をされている。しかし、現在この原本の所在は確認できない。采蘋が萩に持参した詩集はどれであったかは特定できないが、あるいはこの詩集がそれであった可能性もある。この答えを出すためにも『西遊日歴』の詳細な考察が必要であると思われる。

2.1 『西遊日歴』の道程

『西遊日歴』の道程に関しては地図と訪問先の表をすでに学位論文に発表しているので参照していただきたい。采蘋は安政三年（1856）四月二十三日に山家の住居を出発してから島原、長崎、天草、熊本、鹿児島各地の文人を訪ね、求めに応じて書を書き、詩文を添削して二年余りを費やした。もともと旅を愛する性格もあったが、目的の資金を捻出するためには不可欠な旅でもあった。幸い九州各地には采蘋が江戸滞在中に知り合った藩士が帰郷しており、また父古処の旧知もいた。亀井南盟の門人や広瀬淡窓の門人も多く、采蘋の訪問先には事欠かなかったと思われる。また采蘋の江戸での名声は、すでに九州にも知れ渡っていたのである。采蘋の名声が熊本藩主にも届き、書を求められるという名誉を勝ち得た

ことも四百首近い詩の中から知ることができる。

2.2 『西遊日歴』の詩について

自筆本『西遊日歴』は五月九日、若津港で和田廉叔に別れる時に詠んだ「若津別廉叔」という詩から始まっている⁴。若津港に至るまでの経緯は上述した日記に詳述されている。この日記には詩は挿入されていないので、若津港での詩がこの旅の最初の詩であろうか。

日記によれば、四月二十三日、二十余人の送行者と共に山家を出発した采蘋一行は、まず中牟田茶店にて小酌し、次に疆を越えて小店にて大いに飲んでいる。平嶋春航、釋玄遵、大勇道成、曾平夫婦及び完蔵はこの日一緒に泊まり、翌日帰った。采蘋は一行と別れていよいよ一人旅が始まり、広瀬淡窓の門人であつて甘木詩社に学んだ和田廉叔の所にしばらく滞在する。五月に入り柳川に遊び、田尻氏、平野幸右エ門宅に滞在し、五月九日、和田廉叔と雲集に見送られて若津より舟で肥前島原に渡り、和光院に寓居することとなる。采蘋はここでひと夏を送っている。それでは『西遊日歴』に書かれた詩を各地別に分けて検討を加えていきたい。

2.3 各地で詠んだ詩の内訳

『西遊日歴』の三百八十一首の詩の内訳を訪問地別に表にしてみた。

若津港	一首
島原	四十九首
長崎	一首
天草	百五十三首
熊本	九十二首
佐賀	七首
鹿児島	四十五首
福岡	三十三首

『西遊日歴』は肥薩遊歴の日記であるが、古い詩も

⁴ 佐谷写本は「石柱記」から始まっており、自筆本ではこの文章は最後に書かれている。

混在し、書かれた順序も時間に沿ったものとは限らないため、訪問地別に分ける事には限界がある。よって上記の振り分けはあくまでも大まかな判断基準ととらえていただきたい。詩集後部の詩は遊歴後に訪れた福岡で詠まれた詩が付録されている。江戸に向けて再出発するまでに読まれた詩がまとめられた詩集であることから、人生の集大成としての詩集という意味合いが強い。

3.島原滞在中の詩

上記にも示したように、采蘋は主に島原・天草・熊本・鹿児島を拠点にして各地を遊歴した。本稿では島原での文人との交流を中心に稿を進めたいと思う。幸い采蘋は出発から約一か月間の日記を残しているため、島原滞在の前半の様子は日記と詩を照合して検討することができる。

安政三年五月九日、若津港から船で島原に向かい、翌日には島原の港に着いた。

湊

六十年前是海寰 六十年前 是 海寰
即今人屋列沙灣 即ち今 人屋 沙湾に列す
天公曾役愚公力 天公 曾て 愚公の力を役す
一夜移來無數山 一夜にして移し來たる無數の山

○海寰 寰海、天下、全世界。○愚公 愚公という者が山を他に移そうとして長年努力した故事による。

島原の港について、早速和光院に投宿した。翌日には島原藩十五代藩主松平忠精の別荘に招待され、歌を聴いたりして十五日まで滞在したようである。十六日には酒藏家の家に遊び、二泊して、和光院に戻っている。十九日は和光院で書を認め、翌日は湊医者玄震宅で遊び、書を乞われたので一泊した。二十一日には書を認めた後、俵屋揆一が諸生を迎えによこしたので、その晩は本宅に泊まっている。二十二日は強平⁵と柴原龍齋を訪問。書を認むとある。日記は翌日の二十三日で終わっているため、その後の足取りは詩をたよりにするほかはない。

⁵ 付き人か。

しかし次の詩はどこで詠んだものか不明。

答村夫子 村夫子に答ふ
詩海酒場随處醉 詩海 酒場 随處に酔ふ
優遊何必隨名利 優遊 何んぞ必ずしも名利に
随はん
生爲女子非無樂 生れて女子と為りて楽しみ無
きにあらず
抛却生涯事無事 生涯を抛却して 無事に事ふ

○優遊 ゆったりする。

和光院二師及諸子遊小蓬萊分韻 和光院二師及
諸子と共に小蓬萊に遊び韻を分つ
金鰲背上小蓬萊 金鰲の背上 小蓬萊
指點雲山傾幾盃 雲山を指点して 幾盃かを傾く
沈醉不知投宿處 沈酔して 投宿の処を知らず
天風吹夢落瑤臺 天風 夢に吹きて 瑤台に落つ

○金鰲 金色の大すっぽん。神仙の住いである蓬萊山を下から支えているという。○天風 あまつかぜ。○瑤台 玉のうてな。

和光院は島原市加美町にあるお寺で現在も存在する。采蘋はこの寺を寓居として近隣の寺や名所を散策し、また地元の名士に招待された様子が詩から読み取れる。

善法寺雨中小集
山門幸許著塵蹤 山門 幸ひ許す 塵蹤を著すを
來此蹤觀鬪筆鋒 此に來って 蹤ひて觀る 筆鋒
を鬪はすを
火國文章天下最 火国 文章 天下に最たり
眉山黛色雨中濃 眉山 黛色 雨中に濃し
同遊總是一時彦 同遊 総て是れ 一時の彦
斯會須知千歲逢 斯の會 須らく千歳の逢と知る
べし
數字推敲猶未穩 數字 推敲すれども 猶未だ穩
かならず
沈吟執簡欲題慵 沈吟し 簡を執りて 題せんと
欲して慵し

○眉山 長崎県島原市にある山。○黛色 まゆずみのようないろ。

善法寺は和光院に近い寺町にあり、度々訪れたものと思われる。

玄々堂⁶招飲席上次韻主人 玄々堂招飲す、席上主人に次韻す。

連夜宿醒猶未消	連夜の宿醒 猶ほ未だ消えず
泥途又此赴佳招	泥途 又此れ 佳の招きに赴く
盤飴紅蜚推魚鱸	盤飴す 紅蜚 魚鱸を推し
堪笑衰顔上臉潮	笑ふを堪へたり衰顔上臉潮る

○宿醒 二日酔い。○上臉 酒を飲んで赤くなる。
○潮 湿るさま。

又
萍蹤寄遇宿因縁 萍蹤 寄遇す 宿因の縁
談話一堂玄又玄 談話す 一堂 玄の又玄
衆妙之門吾喪我 衆妙の門 吾我を喪ふ
不防醉飽臥君筵 防げず 醉飽 君の筵に臥す

○醉飽 酔酒飽徳の略。お酒もたっぷりごちそうになり、ご恩徳も十分にいただきましたの意。○玄又玄 奥深いうえにも奥深いもの。「玄之又玄、衆妙之門。」『老子』○衆妙 多くのすぐれたもの。

藏六龜
窮通有命又何疑 窮通 命有り 又何をか疑はん
却履危道要多福 却つて危道を履みて多福を要む
人間臧否難説破 人間 臧否 説破し難し
黙識應須在藏六 黙識 応に 藏六に在るべし

○窮通 困窮することと立身出世すること。○臧否 よしあし。善悪。○黙識 心中にさとり。○藏六 龜の異稱。龜は首と尾に、四本の足を合わせて六になることから。「有龜、被野干所得、藏六不出、野干怒而去、佛告諸比丘尼、汝當如龜藏六、魔不得便。」

⁶ 湊医者玄震のことか。

『雜阿含經』

煙波樓
一望烟波上 一望す 烟波の上
點浮松島開 點じ浮びて 松島開く
眞景誰能寫 眞景 誰か能く写さん
此是小仙臺 此は是れ 小仙台

島原市沖に浮かぶ九十九（つくも）島は、寛政四年（1792）四月一日に起きた大地震で、城下町島原の背後にそびえる眉山が崩落、土砂が人家や田畑を飲み込み、有明海に流れ込んだ。そのとき生まれた島々と周辺の小山が九十九島である。松が植わっていてあたかも宮城県の松島を思わせる。采蘋は江戸に二十年間住んだ時に松島に遊んだことが知られている。九十九島を見て松島に想いを馳せたものと思われる。

遊三津村木下宅	三津（沢）村の木下宅に遊ぶ
來遊三澤舊豪家	來遊す 三沢 旧豪家
喬木森々靜可嘉	喬木 森々として 静かなるを嘉とすべし
庭砌引泉洗炎熱	庭砌 泉を引きて 炎熱を洗ふ
樽前留客酌流霞	樽前 客を留めて 流霞を酌む
老衰相對歡無限	老衰 相對して 歡限り無し
佳會難常生有涯	佳の會 常に難く生に涯て有り
欲述幽懷酬厚意	幽懷を述んと欲して厚意に酬ゆ
頑然秃筆不成花	頑然として 秃筆すれども 花成らず

○庭砌 庭の石畳。○流霞 仙人が飲むといわれる酒、流霞酒。○秃筆 自己の詩文の謙称。

島原市有明町は旧三之澤村と称した。三津村は三（之）澤村の誤記であろう。

忘機亭賦而示主人父子二首 忘機亭、賦して主人父子に示す、二首。

裨海劃肥國	裨海 肥国を画し
東西爲二州	東西 二州を爲す
名山各天聳	名山 各おの 天に聳えて
勝具幾時周	勝具 幾時にか周し

對坐談玄理 対坐して 玄理を談ずれば
 忘機伴白鷗 機を忘れて 白鷗に伴ふ
 將辭々不得 將に辭せんとして辭し得ず
 累日尚夷猶 累日 尚ほ 夷猶す

○裨海 小さな海。○勝具 許掾は山水に遊ぶのを好んだが、体も山登りにむいていたので、当時の人は「許はただ勝地をめである心があるばかりでなく、まことに景勝の地を跋涉するための道具をもっているのだ」と言ったことから、丈夫な足を勝具というようになった。「時人云、「許非徒有勝情、實有濟勝之具。」」『世說新語』「棲逸十八」○忘機 世俗のことを忘れる。○夷猶 ぐずぐずして決まらない。

又

忘機亭裡望 機を忘れて 亭裡を望む
 可々慰吟魂 可々として 吟魂を慰む
 笑我再三過 我を笑ひて 再三過ぐれば
 感君一七言 君は感ず 一七の言
 峯巒盡隣國 峯巒は 隣国に尽き
 風景屬君園 風景は 君の園に属す
 清福元天授 清福 元より天授ありて
 相施及子孫 相施して 子孫に及ぶ

○忘機 世事のことを忘れる。○可々 よい。○峯巒 つらな山。○清福 清らかなさいわい。

濟美堂

幼年食牛氣 幼年 牛氣を食み
 終奏屠龍技 終に奏す 龍を屠る技
 苦學惜寸陰 苦学し 寸陰を惜しみ
 醫業活萬苑 医業 万苑に活きる
 吾亦烟霞痼 吾亦た 烟霞の痼となりて
 歳久入骨髓 歳久しく 骨髓に入る
 幸今叩君門 幸ひ今 君が門を叩きて
 □□煩一牝 □□(欠字) 一牝を煩はす
 所祝排多財 祝ふ所 多財に非ず
 多君五男子 多し 君 五男子あり
 庭訓有義方 庭訓 義方有りて
 可知世成美 世の成美を知る可し

○牛氣 傲慢である。尊大である。○屠龍技 無益な技。「朱萍漫學屠龍於支離益、單千金之家。三年技成、而无所用其巧。」『莊子』「列禦寇」○烟霞の痼 烟霞痼疾。山水を極端に愛する性癖。旅行好き。○義方 義にかなった掟。○成美 立派に完成させる。人の美德や長所を励まし勧め、成し遂げさせる。

梅花園壁上有先人之詩、主人囑余用其韻 梅花園壁上、先人の詩有り、主人余に其の韻を用ゐるを囑む

月落參橫處 月落ち 横処に参ず
 有梅自作林 梅有りて 自ら林と作る
 歳寒君子操 歳寒は 君子の操
 晚節主人心 晩節は 主人の心
 海國春多雨 海国 春 雨多く
 山雲晴又陰 山雲 晴れ 又陰る
 花時來不得 花の時 来るを得ず
 逝水跡難尋 逝く水 跡を尋ね難し

○歳寒 寒い季節。冬。○逝水 流れゆく水。一度去って再び還らないものを喩える。

美錦堂

工欲善其事 工み 其の事を善くせんと欲すれば
 必先利其器 必ず先づ 其の器を利ぐ
 若彼不學人 若し彼 不学の人なれば
 何由知民義 何に由りてか 民 義を知らんや
 苛政猛於虎 苛政は 虎よりも猛し
 徒希人主意 徒だ 人主の意を希ふのみ
 聞君夙好學 聞く 君は 夙に学を好むと
 撫字求仁治 撫字 仁治を求む
 輕重心如枰 輕重 心は枰の如く
 誰敢稱不平 誰れか敢へて 不平を称へん
 乃知錦爲美 乃ち知る 錦は美と為りて
 自待裁製成 自ら 裁製成るをを待つ

○工欲善其事必先利其器 職人は仕事を立派にやろうとするとき、まずその道具を鋭利に研いでおく。事を行うには適切な手段やよい条件が大切であるというたとえ。「子曰、工欲善其事、必先利其器。」『論語』「衛靈公」○苛政猛於虎 厳しい政治は民衆の生

活を苦しめ、多くの損害をもたらすので、虎よりも恐ろしい。「孔子過泰山側。有婦人哭於墓者而哀。夫子式而聽之、使子路問之曰、子之哭也、壹似重有憂者。而曰、然。昔者吾舅死於虎、吾夫又死焉、今吾子又死焉。夫子曰、何爲不去也。曰、無苛政。夫子曰、小子識之、苛政猛於虎也。」『禮記』「檀弓下」○撫字 部下や民衆を可愛がる。子供を育てる。○裁製 衣服を程よく仕立てる。

題永制田卷後 永制田卷後に題す
 上有賢明主 上に賢明の主有り
 贊天化育仁 天を賛じて 仁を化育す
 雖歲有凶豐 歳に凶豊有りと雖も
 要無菜色民 菜色の民無きを要む
 里正村里氏 里正 村里氏
 奉揚得其眞 揚奉して 其の眞を得る
 諷諭集富豪 諷諭して 富豪を集む
 同志五六人 同志 五六人
 各捐私田資 各おの 私田の資を捐て
 經營永制田 經營す 永制田
 儲蓄及百世 儲蓄 百世に及び
 悠久萬斯年 悠久 万 斯くの年ぞ
 大道君能行 大道 君能く行かん
 誰謂如青天 誰か青天の如きと謂はん

○永制田（永世田） 農民の貧窮から村方騒動が起こり、それを救済するための対策。島原多比良村で弘化三年に永世田の仕法が始まった。内容は庄屋や地主ら七人が、各自一町歩余を提供し、備蓄するというもの。○化育 天地・自然が万物を生み育てる（中庸）。教え導いて育てる。○菜色 人の飢えたさま。○奉揚 つつしんで宣揚する。○儲蓄 蓄え。

采蘋は多比良村に滞在しているとき永世田について書かれた巻物を見たのであろう。上記の詩はその内容について詳述したものである。松尾貞明著『多比良町郷土誌』p 459 には永世田に関する詩「永制田応里正村里氏需」が載るが、内容はほぼ同じである。

和光院小集
 百計唯求避暑方 百計 唯だ求む 避暑の方
 今年炎熱異尋常 今年の炎熱 尋常に異れり

偶逢韻士誘吾去 偶たま韻士に逢ひて吾を誘ひて去く
 占得山門一味涼 山門を占め得て 一味の涼

○韻士 風流な人。

三江出田氏宅嶋原藩諸士來訪分韻 三江出田氏宅、嶋原藩諸士來訪し、分韻す。

何圖三伏流金節 何んぞ図らん 三伏 流金の節
 群彦相携勞顧眷 群彦 相携ひて 顧眷を勞す
 更無一物酬來旨 更に一物も來旨に酬ゆる無し
 聊將舊句題便面 聊か旧句を將つて 便面に題す

○三伏 夏の暑いとき。○流金 猛暑のたとえ。○顧眷 関心を持つ、心を配る。○來旨 手紙の趣旨。○便面 うちわや扇。

次韻出田翁 出田翁⁷に次韻す
 單身觀國訪名流 單身 國を觀て 名流を訪ふ
 不防暮年爲壯遊 防げず 暮年 壯遊を爲すを
 火国中分隔滄海 火国 中分けて 滄海を隔つ
 文明未識屬何州 文明 未だ識らず 何州に属するかを

題出田三江詩卷後 出田三江詩卷の後に題す
 閑把新詩仔細看 閑づかに新詩を把りて 仔細に看る

知君健筆捲波瀾 君知るや 健筆 波瀾に捲む
 似無時俗爭纖巧 嫵に似たる 時俗 纖巧を爭ふ
 碧海掣鯨應不難 碧海 鯨を掣きて応ずるも難からず

○時俗 その時代の一般・凡俗の人々。時流。○波瀾 文章の起伏変化。

次韻田島傳泉 田島傳泉に次韻す
 有志將爲一世醫 志有りて 將に一世の医と爲る
 周流天下無常師 天下に周流して 常師無く

⁷ 三會村の庄屋出田実成（永吾）の父のことか。

檢書早已窮方伎　書を檢し　早已に　方伎を窮む
 治病不須費苦思　治病　苦思を費すを須みず
 忙裏愉閒迎遠客　忙裏　閒を愉しみて遠客を迎へ
 緒餘執筆賦新詩　緒余　執筆し　新詩を賦す
 留連累日歡難盡　累日　留連するも　歡尽くし難し
 心緒綿々生別離　心緒　綿々として　別離生ず

○周流　めぐり歩くこと。○方伎　医術・神仙術・養生術・占いなどの総称。○緒餘　残り。余り。○心緒　心の動き。情緒。

田島傳泉は多比良村の医師。田島家は代々医師であり、また学者の家であった。特に多比良村は「一村無不読書家」と言われるほど学識者が多く、各地から文人墨客が集まった。

贈漂流人太吉　漂流人太吉⁸に贈る
 小少離郷好旅遊　小少　郷を離れて　旅遊を好む
 行窮東海海窮頭　東海に行きて窮るは　海窮の頭
 石尤風起候波戰　石尤風起ち　波に候ふして戦ふ
 攝汝揺投亞墨州　汝を撮りて　揺かに投ず亞墨州

○太吉　メキシコ漂流をした島原太吉。1799年、島原市片町生まれ。樽廻船「永住丸」に乗って犬吠埼で漂流し、スペイン密貿易船に救助され、メキシコに漂到した。六年後に島原に帰る。○石尤風　逆風。向かい風。石氏の娘が、夫の尤郎が行商から帰らないのを悲しみ、「自分は天風となつて、夫が遠くへ旅するのを天下の妻たちのために阻もう」と言って病死した故事から。「願作石尤風、四面斷行旅。」劉宋・孝武帝「丁督護歌」○海窮　海の果てまで行く。遙か遠くの地に行く。○亜墨州　アメリカ。

又
 漂著連年客異方　漂著し　連年　異方の客となり
 漸諳言語得承當　漸く言語を諳じ承當を得たり

⁸ 漂流人太吉についての聞き書きは、入江湊編訳『墨是可新話』現代出版社と岩尾龍太郎翻刻「島原漂流人太吉物語」『西南学院大学国際文化論集』二五巻一号がある。

有情世界錢神力　情有るも　世界は錢神の力
 萬里波濤歸故郷　万里の波濤　故郷に帰る

○漂著　漂流して岸に着くこと。○承當　あてはまる。○錢神　晋の魯褒の著した「錢神論」。世人が錢の力を尊ぶのをそしっている。「褒傷時之貪鄙、乃隱姓名、而著錢神論以刺之。」『晋書』『魯褒傳』

采蘋は島原滞在中に漂流人太吉について聞き及んだものか、あるいは弘化三年に成立した「島原漂流人太吉物語」、または島原藩医の賀来佐之が記述し、翌年に成立した「墨是可新話」を読む機会があったと考えられる。日本を遠く離れた亜墨州まで旅をした太吉に二首を贈っているのは、采蘋の好奇心を刺激した証拠である。

對山延齡　山に対し齡を延ぶ
 醫家家業術元仁　医家の家業　術の元は仁なり
 仁者樂山自有因　仁者は山を楽しむ自ら因有り
 當戸眉峯好顔色　当戸の眉峯　顔色を好む
 與君相對尋千春　君と相對して　千春を尋ぬ

○仁者樂山　仁者は天命に安じて、物欲に動かされず、その心が静かなさまは動かない山に似ているから山を好む。『論語』『雍也』○顔色　顔つき。色彩。面目。尊嚴。

3.1 長崎に赴く

采蘋は島原滞在中、八月中旬長崎に赴いている。長崎はかつて文政六年(1823)、二十六歳の時に半年間垂帷したところであり、旧知の有力者や文人が多くいたのである。

偶成用于漬韻　偶成、于漬の韻を用ふ
 歸郷又出郷　郷に帰り　又郷を出づ
 浮遊無定住　浮遊して　定住無し
 日月亦不居　日月　亦居らず
 涼生昨夜雨　涼は生ず　昨夜の雨
 清風起蘋末　清風　蘋末に起ち
 秋色入蒲柳　秋色　蒲柳に入る
 且止東南行　且く東南の行を止め

先指瓊浦去 先づ瓊浦を指して去く

○于漬 晩唐の詩人。字は子。『于漬集』一卷がある。○蘋末 水草の上。○蒲柳 かわやなぎ。秋になるとすぐに葉が散る。

この詩の内容から一度目の長崎行きは八月中旬と思われる。二度目の長崎行きは安政四年五月、天草に滞在中に天草の友人同伴で数日間の長崎訪問を楽しんでいることが『漫遊日歴』に書かれているが、この時の詩は『西遊日歴』には見られない。

3.2 島原に戻る

上記の長崎行きの詩に続く詩を以下にあげたが、八月半ばに長崎から戻ったとすれば「七夕前一日」の詩は時期的に合わない。やはり采蘋は詩を清書した時に、詩作の時期を前後させて書き写したと考えられる。あるいは以前に書いた詩を混入させたことも考えられる。

七夕前一日

詞客争裁祈雨詩 詞客 争裁す 雨を祈る詩
曾無一雨起枯萎 曾て一雨無く 枯萎起つ
願將天上洗車水 將に願はんとす 天上 洗車の水
灑自公田及我私 公田自り灑ぎて 我私に及ばん

○枯萎 枯れしむ。○洗車水 洗車雨のこと。七夕の前後に降る雨。

百日紅

廿四番番花信風 廿四 番番 花信の風
春容減却轉頭中 春容 減却し 頭中に転ず
誰知肅殺凄凉裡 誰か知る 肅殺 凄凉の裡
自有秋芳百日紅 自ら 秋芳有り 百日紅

○花信 花のたより。小寒から穀雨の四ヶ月、八気二十四候の間に、季節の風が違ふ花を次々に咲かせてゆく。○番番 一回また一回と。○春容 春の景色。○肅殺 秋冬の気候が激しいさま。○百日紅 サルスベリ。日本には、江戸時代以前に中国から伝わ

る。

雁

春水緑時向北回 春水 緑時 北に向ひて回り
秋雲白處又南來 秋雲 白處 又南に来る
天南地北呼群去 天は南 地は北 群を呼びて去く
不識人間遠別哀 識らず 人間 遠別の哀みを

○緑時 春の季節。○白處 秋の地。

雁字

丹楓黄葉夕陽天 丹楓 黄葉 夕陽の天
賓雁書空雲作箋 賓雁 空に書きて雲 箋と作る
字字挾來風秋興 字字 挾み来つて 風 秋興
斷文吹落蓼花邊 文を断ちて吹き落とす蓼花の辺

○雁字 かりのならば飛ぶのを文字に喩えたもの。○賓雁 雁のこと。毎年秋に来て春に去ることから賓という。○字字 雁の列を字に喩える。

孤雁

滄溟萬里一枝蘆 滄溟 万里 一枝の蘆
弦月相携影忽孤 弦月 相携ふ 影忽ち孤なり
四顧非無稻梁美 四顧すれば 稻梁の美きの無きにあらず
單行難得弟兄俱 單行は 得難し 弟兄の俱
兼葭獨宿夢群侶 兼葭 独り宿る 群侶の夢
風雪滿天聞叫呼 風雪 天に満ちて 叫呼を聞く
須向青冥高處去 須く青冥に向ひて 高處に去く
恐他年少漫張弧 他を恐る 年少 漫く弧を張る

○稻梁 穀物。○滄溟 大海原。広く深い青空。○弦月 陰曆九月の異名。○四顧 あたりを眺める。周囲。四方。○兼葭 水草のおぎとあし。○青冥 青空。仙境。○張弧 弓を引く。

牽牛花

殷紅深紫或琉璃 殷紅 深紫 或は琉璃
含露牽牛蔓竹籬 露を含む 牽牛 竹籬に蔓る
此是君家錦步障 此の 是れ 君が家 錦の歩障

朝朝新様更清奇 朝朝 新様 更に清奇なり

○殷紅 黒みがかった深い赤色。○歩障 身分の高い人や権力者が外出する時、風やほこりを避けるために用いる囲い幕。

鷹

風霜昨夜降江皐 風霜 昨夜 江皐に降りる
萬里澄清秋氣高 万里 澄清 秋氣高し
鐵嘴饑鷹思一飽 鉄嘴 饑鷹 思ひ一に飽く
寄言燕雀勿翔翱 寄せて言ふ燕雀翔翱する勿れと

○江皐 川べりの地 ○饑鷹 飢えた鷹 ○翔翱 あちこち飛び回る。

鶴皐霜華亭人去知 鶴皐霜華亭、人去きて知る
丹項縞衣玄是裳 丹項 縞衣 玄 是れ裳なり
秋風嘹唳九皐霜 秋風 嘹唳 九皐の霜
華亭人去知音少 華亭 人去りて 知音少なし
聊向雞群啄稻粱 聊か 雞群に向ひて稻粱を啄む

○嘹唳 鳥の鳴き声。○九皐 奥ふかい沼沢地。○華亭 『晋書』『陸機伝』に、陸機が殺されようとしたとき、昔、華亭で鶴の声を聞いて楽しんだことを思い出して嘆いたと伝える。「陸機雄才豈自保、李斯税駕苦不早。華亭鶴唳詎可聞、上蔡蒼鷹何足道。」李白「行路難其三」

絡緯

木犀香散處 木犀 香を散じる處
暑退夜凄其 暑は退き 夜 凄なるは其れか
絡緯鳴金井 絡緯 金井に鳴きて
空床思婦悲 空床 婦悲を思ふ

○絡緯 こおろぎ。「絡緯秋啼金井闌、微霜淒淒簾色寒。孤燈不明思欲絶、卷帷望月空長歎。」李白「長相思」○金井 金をちりばめた井戸。

和木村雞窓 木村雞窓に和す
獨往飄然觀國寶 独り往きて 飄然として 国寶を觀る

霸遊何地不依人 遊を霸すは 何れの地か 人に依らざらん

八旬枯旱逢令雨 八旬の枯旱 雨に逢はしむ
一味清涼蘓此身 一味の清涼 此の身蘓る
金石擲來慰岑寂 金石 擲げ來つて 岑寂を慰む
銀蟾躍處現嶙峋 銀蟾 躍る處 嶙峋現る
風神瀟灑如君少 風神 瀟灑として君少きが如し
爲洗胸中萬斛塵 胸中 万斛の塵を 洗はんとす

○岑寂 寂しい、ひっそりとしている。○嶙峋 がけが重なり奥深いさま。がけが切り立ってつき出たさま。○萬斛 極めて多くの分量。○銀蟾 月の異名。蟾は月中にいるという蟾蜍（ヒキガエル）。○嶙峋 山が重なり連なるさま。○風神 人がら。風格。○瀟灑 すっきりと垢ぬけたさま。さっぱりして清らかなさま。○萬斛塵 多くの塵。

西王母

曾奏白雲觴穆王 曾て奏す 白雲 穆王に觴す
爾來閱盡幾星霜 尔来 閱み尽す 幾星霜
多情難奈柔腸熱 多情 奈んぞ柔腸の熱きに難からん
又向春風思漢皇 又向ふ 春風 漢皇を思ふ

○穆王 『穆天子伝』に西王母に見えたことが記されている。「乙丑、天子觴西王母於瑤池之上。」『穆天子傳』卷三○爾來 その時以来。○柔腸 心。

東方朔

上苑春風青雀回 上苑の春風 青雀回りて
君王夜宴集靈臺 君王の夜宴 靈台に集ふ
蟠桃花開無人護 蟠桃 花開きて人護ること無く
恰好我偷一顆來 恰も好し 我 一顆を偷み來る

○東方朔 『漢武故事』に、西王母の桃を三度盗んだとある。○青雀 西王母の使いをした鳥。「有二青鳥如鳥、夾侍母傍。」『漢武故事』○蟠桃 仙人の住む山にあるという桃の木。

上記の二首「西王母」「東方朔」は春を詠んだものであるため前後の詩にはそぐわない。以前に詠んだ

詩を混入させたと考えられる。

十三夜和光院
節近中秋雨僕簾 節は中秋に近く 雨 簾を僕つ
織塵鍋盡滅殘炎 織塵 鍋を尽して 殘炎を滅す
姮娥不解詩人意 姮娥 詩人の意を解せざれば
深鎖廣寒宮裏潜 深く鎖して 広寒の宮裏に潜む

○織塵 こまかいちり。○殘炎 残りの暑さ。○姮娥 『淮南子』「覽冥訓」の本文と高注によれば、西王母の不死の薬を盗んで飲み、仙人となった姮娥は月中に奔り、月の精となった。○廣寒 月にあるという宮殿の名。

十四日遊小蓬萊 十四日、小蓬萊に遊ぶ
相携重上納涼臺 相携へて 重ねて上る 納涼台
閑奏霓裳待月來 閑奏す 霓裳 月の来るを待つ
潮至須臾天地別 潮至りて 須臾 天地別る
身疑羽化在蓬萊 身は羽化を疑ひて 蓬萊に在り

○霓裳 霓裳羽衣曲 唐代の天女を歌った舞曲名。もとは婆羅門曲といいそれに玄宗が手を加えてのち名を改めた。玄宗が道士羅公遠に伴われて月宮に入り、そこで聞いた天界の音楽を写したものという。○須臾 しばらく。○羽化 道士の死。

十五夜
十千之酒萬錢羞 十千の酒 万錢羞づ
迎客同酬三五秋 客を迎へ 同に酬ゆ 三五の秋
嫋嫋歌聲統梁激 嫋嫋たる歌声 梁を統べて激し
醉中人似月宮遊 醉中 人は月宮に遊ぶに似たり

○嫋嫋 風がそよそよと吹く様子。たおやかでなよなよとしたさま。音の澄み渡るさま。○統梁 美しい歌声が梁を占めた。音楽の名家魯人愚公が歌ったとき、はりの上の塵まで動いたという。

賀木村氏六十一誕辰 木村氏六十一誕辰に賀す
温泉山下鴨頭緑 温泉山下 鴨頭緑なり
釀作君家霞萬斛 君が家に釀し作すは 霞 万斛
一飲能使人長生 一飲すれば 能く人をして長生

せしむ
乃ち知る 酒は是れ 天の美禄
今春 宴を開く 華甲の子
階庭の蘭玉 清淑を尽す
華封 三祝 君皆有りて
多財 多子 不足無し
心に逆ひ耳に順ふ莫れ
料り知る 壽を筭へて 海屋に
添へんことを

○温泉山下 温泉（うんぜん）と読まれていた。温泉神社も（うんぜんじんじや）である。○鴨頭 鴨の頭。水の緑色のたとえ。○萬斛 極めて多くの分量。○美禄 良い賜物。酒のことをいう。○華甲 六十一歳。○清淑 清らかでよいこと。○華封 華の地を守る人。堯が華を視察したとき、堯のために寿と富と男子の多いことを祈った故事を踏まえる。「堯觀乎華。堯觀乎華、華封人曰、嘻、聖人。請祝聖人。使聖人壽。堯曰、辭。使聖人富。堯曰、辭。使聖人多男子。堯曰、辭。封人曰、壽富多男子、人之所欲也。女獨不欲、何邪。堯曰、多男子則多懼、富則多事、壽則多辱。是三者、非所以養德也、故辭。〔疏〕華、地名也。今華州也。封人者、謂華地守封疆之人也。」「『莊子』「天地」○莫逆於心順於耳 「六十而耳從。七十而從心所欲不踰知。」「『論語』「爲政」○壽筭添海屋 海屋添寿のこと。人の長寿を祝う詞。海屋仙人の住いに、仙鶴が毎年一寿を啣えてくるという伝説による。

應某人需 某人の需めに應ず
骨肉相仍父子孫 骨肉 相仍ち 父子孫
一家無恙三夫婦 一家 恙がなく 三夫婦
人生至樂誰如君 人生の至樂 誰か君に如からん
風晨月夕常聚首 風晨 月夕 常に首を聚む

○月夕 月末。「月朝ト日、月夕ト宅。〔楊倞注〕月朝、月初也。月夕、月末也。」「『荀子』「禮論」

志敵園
早達曾占畫錦美 早に達し 曾て占ふ 画錦の美
座觀人生如流水 座して觀る 人生 流水の如し

強壯罷職開漸洳 強壯 職を罷めて 漸洳を開く
 菟裘新營水石居 菟裘 新たに営む 水石の居
 水統柳塘亘夏月 水は柳塘を統りて 夏月に亘し
 中移胡床消炎熱 中に胡床を移せば 炎熱消ゆ
 園中六景四時望 園中の六景 四時望む
 架上萬卷百城王 架上の 万巻 百城の王たり
 歆譴常縱滿座客 歆譴し 常に満座の客に従ふ
 高吟長歌是君適 高吟 長歌 是れ君に適す

○晝錦 錦を着て、それが目立つ昼に行く。出世して故郷に帰るとえ。○強壯 三、四十歳ごろ。強く健康なさま。○漸洳 むかるみ。○菟裘 隠棲の地。○水石居 すがすがしく雅な景観の住い。○百城 多くの城。「李謚言、丈夫擁書萬卷、何假南面百城。』『北史』『李謚傳」○歆譴 喜びふざける。

留別

聚散如風葉 聚散 風葉の如し
 臨岐各自愁 岐に臨みて 各おの 自ら愁ふ
 相逢應有日 相逢ふ 応に日有るべし
 腸斷爲羈離 腸断ず 羈離と為るを

○臨岐 人を送り、岐路に至って別れる。○羈離 他郷に漂泊すること。

この留別はひと夏を送って島原を去る時のものか、あるいは長崎に旅行するときのものか不明。

賀中村翁七十初度 中村翁七十初度に賀す
 羨君雖老益精神 君を羨む 老ゆと雖も精神を益す
 髮載秋霜心若春 髮に秋霜を載すとも 心は春の若し
 獻壽方開古稀宴 獻壽 方に古稀の宴を開く
 不凡男子有三人 不凡の男子 三人有り

○精神 気力。○秋霜 白髪を喩える。○獻壽 長寿を祝福する。

秋雨與中村品川二生同賦分花吐知秋至爲韻 秋雨、中村品川二生と同一に賦す、花吐知秋至を分ち

て韻と為す

秋風寂寞空階雨 秋風 寂莫として 空階の雨
 客中迎客無賓主 客中 客を迎ふも 賓主無し
 一言道合非胡越 一言 道合へば 胡越に非ず
 不妨肝瞻向君吐 妨げず 肝瞻 君に向ひて吐くを

○空階 人の気配のないものさびしい階段。○胡越 敵対・対立の関係を喩える。○肝瞻吐 腹藏なく心中を吐露する。

次韻中村觀水詩盟 中村觀水詩盟に次韻す

樂地優遊火海濱 樂地 優遊す 火海の浜
 文明到處總爲隣 文明 到る処 総て隣と為す
 單身投宿無常主 單身 投宿 常に主無く
 同氣相求不厭貧 同氣 相求め 貧を厭はず
 經學一生老經學 經学 一生 經学に老ゆ
 詩人終古愛詩人 詩人 終古 詩人を愛す
 強分才德非吾事 強ちに才徳を分くるは 吾が事に非ず
 彼此忘來自是眞 彼れ此れ 忘れ来つて 自からはれ真なり

○中村觀水 名は正豪、守山村の人。漢学塾を開く。○樂地 安楽な土地。○文明 文徳のあること。○終古 つねに。

梅

疎影橫斜月下村 疎影 横斜す 月下の村
 春風何處返香魂 春風 何れの処にか 香魂を返さん
 莫將玉笛樓頭弄 玉笛を將つて 樓頭を弄す莫れ
 唯恐梅花作雪飛 唯だ恐る 梅花 雪と作つて飛ぶを

○横斜 斜めに横たわる。「疎影横斜水清淺」林逋「山園小梅詩」○香魂 花の精。美人の魂をいう。○樓頭 楼の上、また楼のほとり。

島原滞在は夏季であり、上記の「梅」の詩も以前に詠んだ詩を混入したものと思われる。

珠數應某人囑 珠數某人の囑めに応ず
 先人歸命信浮屠 先人命に帰して 浮屠を信ず
 三礼一刀刻念珠 三礼し 一刀 念珠を刻す
 莫言長物曾無用 言ふなかれ 長物 曾て無用と
 欲遺孫子度凡夫 孫子に遺さんと欲して 凡夫に
 度す

○歸命 仏を深く信じる。○浮屠 仏教。○三禮 天・地・人(先祖)を祭る礼。○長物 役に立たない余計なもの。○凡夫 仙人や仏教者に対して平凡な人、世俗の人のことをいう。

張良
 一編黃石卷 一編は 黃石の卷
 三寸王者師 三寸は 王者の師
 食留却避穀 食留めて 却て穀を避く
 終始似君誰 終始 君は誰にか似ん

○張良 (?-216) 前漢の政治家。字は子房。祖は韓の貴族。始皇帝の暗殺を謀って失敗。後に劉邦の軍師となり、漢の建国を助け、留侯に封ぜられた。○黃石 秦の隱士。圯上老人とも。漢の張良に老人の姿で靴を拾わせて兵書を授け、後に黃石となって張良の前に現れた。○三寸 舌をいう。○避穀…穀物を食することさけて神仙を求めること。

有雪山墨蹟花是二字余續貂而作一絶應長尾氏需
 雪山墨蹟花是二字有り、余続貂して一絶を作りて、
 長尾氏の需めに応ず
 花是吾家主 花 是れ 吾家の主たり
 春日燕嘉賓 春日 燕 嘉賓
 雖有如浥酒 浥酒の如き有ると雖も
 無花不作春 花無く 春と作らず

○燕 宴。○嘉賓 りっぱな賓客。○續貂 狗尾續貂。優れた物の後に粗悪なものが続くこと。他人の残した仕事を継ぐことを謙遜するという言葉。○浥酒 香気の高い酒。

4.おわりに

采蘋の肥薩遊歴を記録した詩集『西遊日歴』の中で、最初にひと夏を送った島原で詠んだと思われる詩を中心に紹介してきた。島原は周知のように「島原の乱」や1792年の普賢岳噴火・眉山崩壊などによって多難な藩政治を強いられた土地である。采蘋はひと夏の滞在ではあったが、こうした事情を見事に詩に詠みこんでいる。では、采蘋が滞在先に島原を選んだ理由は何であったのか。島原藩第十三代藩主忠侯が古賀精里に入門して以来、十四代忠誠が古賀精里の三男侗庵に入門、さらに十五代忠精は古賀精里の孫茶溪に入門している⁹。采蘋は江戸滞在中古賀家との交流を深めていたことは日記中¹⁰にも書かれている。島原で采蘋が十五代忠精の別荘を訪ねていることから島原藩との交流が江戸滞在中にあったことが考えられる。また古賀精里・侗庵に師事した藩儒川北温山は頼山陽・亀井南盟・広瀬淡窓とも交流があり¹¹、おそらく采蘋とも面識があったと考えられる。こうした理由から島原の文人を訪ねたものと思われる。

しかし、改めて詩を一つ一つ検討してみると、詩の順番は必ずしも時間通りには書かれていない。季節も前後していたり、山田新一郎氏も指摘するように¹²、過去に詠んだ詩も混在している可能性がある。自筆本『西遊日歴』は采蘋自身の写本であるが、原本が未調査であるため、詩の順番の異同が確認できないのは残念である。これまで詩の順番から道程を推測して、地図や訪問先の表を作成してきたが、采蘋が清書した段階で、必ずしも旅の道程通りに詩が書かれているとは思われないことから、今後この道程も修正の必要が出てくる。

自筆本テキストは、二年超に及ぶ期間に書かれた三百八十一首の詩から構成されており、また各地で出会った人の人名録も付記されていないことから、道程を確認する作業は至難の技であった。次稿では天草島の文人との交流を考察していきたいと思う。

(Received: September 30, 2014)

(Issued in internet Edition: November 1, 2014)

⁹ 『島原の歴史 藩制偏』島原市役所、1972年12月。

¹⁰ 「有煒楼日記」、学位論文参照。

¹¹ 『島原の歴史 藩制偏』島原市役所、1972年12月。

¹² 『原采蘋女史西遊日歴抜粋』にある山田氏の注。